

# 生きる

2020年、私たちは新型コロナウイルスにより、さまざまな変化を求められました。オイスカが活動する各国では日本以上に厳しい行動制限が強いられた地域も多く、予定していた活動が思うように進められない時期が長く続きましたが、その中で「今できる」取り組みを進めてきました。そうした活動の中にコロナ禍だからこそその工夫や新たな挑戦、そして喜びがありました。withコロナの時代を進む海外の現場の様子をお伝えします。



## コロナの影響

本部・海外事業部で週に一度行われている会議では、それぞれの国の活動を担当するスタッフが現地の最新情報を共有していますが、ここ数カ月はコロナ関連の情報や報告が多くを占めています。8月26日の議事録には、

◎ミャンマーではしばらく感染拡大は見られなかったが、大使館発表によると8月15〜21日に40名の新規感染が確認され、約半数はバングラデシュに隣接するラカイン州の市中での感染者であるため、同州では自宅待機などの措置が新たにとられている

◎フィリピンの感染者は現時点で18万9千件を超えている。フィリピン総局のジェット・ロハス会長によると、同氏が町長を務めるイロイロ州・アホイ町の職員の中に陽性者1名が確認され、事務所は消毒のため閉鎖。ロハス氏自身も9月4日まで隔離されている

◎タイでは、8月末で緊急事態宣言が解除される予定だったが、9月末まで延期された

といった報告事項が並んでいます。

国内に目を移すと、特に感染者の拡大が著しかった東京では、本部事務所は勤務体制を大幅に変更。電車通勤者は混雑する時間帯を避け、極力在宅勤務に切り替えるなど、状況に応じた対応がなされてきました。また、「富士山

の森づくり」や「海岸林再生プロジェクト」といった森づくりの現場でのボランティアの受け入れを中止するなど、予定していた活動に大きな影響が出ました。各支部で予定していた海外への植林ツアーなども実施できない状況です。

人材育成事業においても、帰国予定の研修生や技能実習生が、それぞれの国の入国制限あるいはフライトの中止や減便により、日本での滞在延長を余儀なくされています。フィリピンやミャンマーなどではリリーフフライト（帰国できない人たちのための救済便）が用意されましたが、大使館に申請をしたものの、帰国の優先度などの判断から、研修生や技能実習生の搭乗がなかなか許可されない状況が続きました。

8月末日現在、帰国できずに日本滞在を延長している技能実習生は、ベトナム4名（10月中旬に帰国の見込み）、日本への入国待ちの実習生がフィリピン13名、ベトナム8名、マレーシア8名となっており、送り出し側、受け入れ側双方にさまざまな対応が迫られています。

## コロナ禍とはいうものの……

一方で、コロナによる影響は災いばかりではないようです。例えば、世界各地での移動や経済活動が制限されたことにより、「ヒマラヤがはつきり見えた!」「川の水が透明になった」とい

った、環境汚染改善事例が多く報告されています。実際、NASAの衛星が多くの大都市で大気汚染の減少を確認しているといえます。また、普段は人であふれかえるビーチから人がいなくなったことで、ゴミ問題が解消されたほか、ウミガメの産卵が例年よりも多かったといった事例もあります。

オイスカの各国の現場からも、「今できること」を考え、スタッフが行動し、コロナ禍ならではの新たな取り組みが報告されています。ここでは、訪日研修生OBたちが協力し、オイスカらしい活動を展開しているモンゴルの活動を紹介します。

## モンゴル

モンゴル政府は、最初に新型コロナウイルスの感染者が確認された中国と国境を接していることから、1月上旬より国内における感染拡大防止に力を入れてきました。2月に高度警戒準備態勢を発令、モンゴル発着の全航空機の運航を停止するなど、徹底した水際対策を講じました。学校の休校決定も迅速かつ長期間実施され、再開されたのは9月1日のことでした。

国内の感染状況が落ち着いてきた4月には移動制限が解除され、オイスカスタッフも4月下旬から、ようやく植林地などの視察、調整などを段階的に再開することが可能となりました。活



# コロナと生



休校中の子どもたちも楽しんで野菜づくりに参加。安心安全な食料の確保ができるようになったことへの喜びの声が多く聞かれた



指導を行うのには限

動地を視察する中で見えてきた問題は、国境が閉鎖されたことで、中国からの農産物の輸入が途絶え、食料品の価格が高騰したことでした。  
そこで6月2・3日、「子供の森」計画（以下、CFP）を展開するオルホン県バヤンウンドル村とブルガン県ダシンチレン村の計40世帯に対して、コロナ緊急支援の一環として、食料の安定的な確保を目的とした家庭菜園支援活動を実施。14種類の野菜の種苗、道具などを配布し、日本で農業を学んだ研修生OBたちが、野菜栽培の研修を実施しました。対象の40世帯は、CFP参加校に通う子どもたちや高齢者がいる家庭などを地元行政と調整して選び、その多くは野菜づくりの経験はありませんでした。そのため、スタッフのもとには「発芽した野菜の葉と雑草の区別がつかない」といった初歩的な質問や細かな相談が多く寄せられましたが、毎回出向い

界がありました。そこで、現地スタッフのアイデアで、情報交換の場として「Cookoo」でグループを作成。各家庭が畑の様子や収穫した野菜の調理方法を日々投稿できるようにしたところ、それまで分からないことはスタッフに質問していた参加者が、互いに相談しあって解決につなげるといった動きもみられるようになり、今までにはなかった方法でコミュニケーションを取りながら、活動を進めることに成功しました。  
また、参加者の活動に対する意欲が高く、取り組みが積極的なことから、地域のニーズに合ったものだったことも分かります。参加者同士でアイデアを出し合っているほか、近隣の住民にも自分たちの学びを伝えるなど、活動が広がっています。  
現地スタッフのトゥメンからは、「何よりもよかったのは、野菜に関する知識が少ないモンゴルの人々に、野菜栽培について教えることができたこと。私たち訪日研修生OBは、日本での農業研修を通じて、野菜のおいしさや栄養について多くのことを学んだが、モンゴルには、農業研修センターがなく、地域で農業指導をする機会が少ないため、今回は対象が限られていたものの、野菜づくりの楽しさを伝えることができてよかった。新型コロナウイルスという今まで経験したことのない問題の前に、これまでは異なる方法で活動



収穫した野菜の調理方法も指導。冬に向け、長期保存できるピクルスや塩漬けが好評だった

を行う必要がある、新しい取り組みができたことをうれしく思っている」と喜びの声が寄せられました。  
9月には、参加者たちが取り組みの成果を報告するとともに、収穫した野菜や加工品を持ち寄る発表会が開かれ、各自がやりがいや自信をもって活動に参加していることがうかがえました。  
また、再開した学校では、マスク着用が義務付けられていますが、経済的な理由でマスクを用意できない家庭も多くあります。CFP参加校であるオルホン県第4学校では、エコクラブの子どもたちが調整員とともにマスクを450枚手づくりし、学校と調整して必要な子どもたちに寄附する取り組みも行いました。



マスクを縫う子どもたち。完成したマスクにはOISCAのスタンプも(左上)

# 新型コロナウイルス関連の 各国の取り組み

本誌6-7月号でもコロナ禍における各国の活動について報告しましたが、新たに報告が届いた3カ国の国の取り組みをまとめました。

## メキシコ

メキシコでは感染者が60万人に達する勢いで広がっており、死者数も6万人を超えています（8月末時点）。メキシコ総局では、早い段階で国内の感染拡大を想定し、医療従事者にとって欠かせない防護服やマスク、フェイスガードなどの配布を決定。オイスカの活動に理解のある地域住民やそのネットワークを活かし、防護服用の布探しから、裁断、製造まで多くの人が関わり、4月には約200セットを医師や看護師、病院を裏で支える整備士な



上／寄贈された防護服を着用する医療関係者  
下／特製オイスカトラックで配布、販売する野菜や果物を選ぶマルティン会長。オイスカが目指す“ふるさとづくり”の活動を、地域住民の助け合いで実践した

どに配布しました。困難に直面する医療関係者からは、住民を中心とした協力に、感謝の声が寄せられました。

また、市場の閉鎖などで食料品の流通もストップしていた地域では、生産者と消費者をつなぐサポートも行いました。半乾燥地帯で農業用の潤沢な水の確保が難しいことから、日頃からメキシコ総局では簡易水耕栽培による家庭菜園の指導を行っており、今回はそうした指導対象地域の生産者から野菜や果物などを購入し、それを失業者へ無償で配布。また、オイスカ活動に関わる人々に対して購入しやすい価格で提供することで、活動地の住民同士が互いに支えあう協力の輪をつくりました。

## パプアニューギニア

5月20日、ラバウル・エコテック研修センターでは、地域住民支援の一環で、感染拡大防止に向けたマスクづくりの指導を行いました。これは、女性のエンパワーメントを目的とした裁縫

教室の中で実施されたものですが、今回は女性だけでなく、男性や子どもたちも参加、多くの人が初めてマスクを手にする事となりました。この時点で感染者数は全国で10名程度でしたが、海外の状況を伝える映像で、感染者が多数亡くなっている様子が伝わっていたため、住民の間には緊迫感が感じられました。

この日は、石けんを使った適切な手洗いの指導も実施。こうした感染拡大防止に向けた地域住民に対する取り組みは、6月にも継続して行われました。



マスクに対する地域住民の関心の高さがうかがえた



パプアニューギニアならではの手洗い指導の様子

## フィリピン



上／オンラインセミナーを開催するマニラ事務所のスタッフ

下／動画作成には、国内外から610名が参加。日本からも京セラ労働組合から88名にご協力いただいた



フィリピンでは、9月現在、感染者数が東南アジア最大となっており、学校も全国的に閉鎖された状態が続いています。オイスカでは、4月より地域のニーズに即した支援活動や、感染拡大防止に向けた取り組みを進めています。移動を伴う活動が制限される中、CFPでは、9月1〜4日に、教師や調整員を対象としたオンラインセミナーを開催。専門家を講師に招き、気候変動と感染症、メンタルヘルス対策、今後の教育形態の変化などをテーマにした講義を行いました。オンラインによる開催のため遠隔地からも受講が可能になり、多い日には100人近くが参加するなど、時勢に即したテーマに多くの関心が寄せられました。また、長期にわたる規制で不安や疲労が重なる中、互いに励ましあい、感染症に立ち向かおうと、CFP関係者の写真を集めた感染予防動画の作成などを行い、発信を行っています。

# ご支援ありがとうございました

コロナ禍で活動休止を余儀なくされる中、「今できること」をそれぞれが考え、地域社会のニーズに合わせて取り組みを続ける海外のスタッフからの報告を受け、その活動を支援するための緊急支援募金を5月25日より開始。全国の会員の皆さまをはじめとする90名の方にご協力いただき、113万7552円になりました。ご支援ありがとうございました。今後も各国で続くコロナ対策活動への支援とさせていただきます。

ご支援くださった方からのコメントの一部を紹介いたします。

●日本の研修センターや現地訪問ツアーなどに関わりのあった、各国の研修生OB・OGや、その国のコロナ禍の状況が心配で気にかけていたが、今回のオイスカの新型コロナ支援の活動報告を見て、まずは安心しました

●弊社にも、フィリピンからの研修生が3名おり身近に感じております。今回、新型コロナウィルス対策として、社員に会社からマスクを支給するのに合わせ、募金をしました。少しですが、お役立ていただけると嬉しいです

●会社は、全国に事業所があるため、多忙でなかなかオイスカの現場まで足を運ぶ時間がありません。その分、できるこ

とで支援をしたいとの思いが強く、今回募金をすることにしました

●自分は公務員をしており、特に困ることがないことから、一律10万円の特別定額給付金の有効活用を考えていました。地元の方に半分、残りの半分は、オイスカの新型コロナ募金に寄附することにしました

●もちろん日本もコロナ禍で大変だが、海外の方が状況はよくないのではないだろうか。また、オイスカの現場の日本人職員、現地職員の人たちが、このコロナ禍で無事に業務ができていいるのか、健康面はどうだろうか。それらが心配になり、今回寄附をさせていただきました。コロナ禍が落ち着いたら、また現地を訪問したいと考えています。応援しています

これまでの取り組み同様、今後の活動も現地からのレポートが届き次第下記サイトで報告します。ぜひご覧ください。

各国の取り組みの最新情報はこちらをご覧ください



<https://www.kodomonono-mori.info/corona/>

## 現地駐在員からのレポート



フィリピン・バゴ研修センター所長

### 渡辺重美

センターがある西ネグロス州では、3月23日から5月中旬までロックダウンが続きましたが、5月18日からセンターの活動を再開させ、皆元気にそれぞれの業務、研修に励んでいます。

ロックダウン中は、各スタッフを家に戻していましたが、養蚕事業を止めるわけにはいきません。村から特別な許可を得た少数の養蚕担当スタッフと研修生で蚕の世話にあたりました。また、私自身は年齢による外出禁止令の対象となり、買い物にも行けませんでしたし、銀行に行くにも村からの証明書の発行が必要で、これまでの日常とは全く違うものとなりました。日本でも検温やアルコール消毒などが当たり前になっていると思いますが、こちらではショッピングモールに入る際、それらに加えて住所の記入も求められます。

現在（8月24日）も外出制限は継続中で、隣の東ネグロス州や、NGO連携無償資金協力で進む活動地であるパナイ島への移動ができません。人が大勢集まることも制限されているため、養蚕事業で計画していた農家を集めてのミーティングができず、ソーシャルディ

スタンスをとりながらの代表者と道端でミーティングに変更。計画通りに進まないもどかさもありますが、外出制限の中で、養蚕農家が蚕の世話に集中できたため、品質が向上するといったよい面もありました。また、蚕が思わぬところで注目も浴びました。九州大学とベンチャー企業が、新型コロナウィルスのワクチン候補となり得る、蚕を活用した、たんぱく質の開発に成功したのだそうです。サナギを食べることで効果が得られるとの話を聞き、毎日サナギを食べています！

以前からの習慣である早朝のジョギングには、マスクをつけて出かけていますが、最近は若い人たちが同じようにジョギングやウォーキングをする姿を多く見かけるようになりました。困難な状況の中で、健康に対する意識が向上しているのを感じますし、保健省や政府の指示に村の人たちが柔軟に従う姿に感心し、今回のコロナ禍がよりよい地域づくりのきっかけになっているのではないかと思います。



家庭菜園の需要が高まり、農業用資機材の価格が高騰する中、センターでも野菜の栽培を拡充している。特にカボチャの生育が順調で、近隣住民（主に在住日本人）の購入につながっている